

最新版(英語版)はこちら

最終改訂年月 : 18 June 2004

背景: リンパ浮腫は、リンパ管排液メカニズムの閉塞により体内に過剰な体液が蓄積する病態である。四肢のサイズを減少させるために、リンパ管の詰まりを取り除く管理法が行われている。理学療法プログラムのどの構成要素が最も重要であるかについては、議論が多い。

目的: リンパ浮腫を認める四肢の容積、形、状態および浮腫の長期抑制に対する理学療法プログラムの効果とともに心理社会的ベネフィットについても評価する。

検索戦略: Cochrane Breast Cancer Group trials register(2003年9月)、Cochrane Central Register of Controlled Trials(Cochrane Library、2003年4版)、MEDLINE、EMBASE、CINAHL、UnCover、PASCAL、SIGLE、British Lymphology Societyの作成による参考文献一覧表、National Research Register(NRR)およびInternational Society of Lymphology議事録を検索した。

選択基準: 少なくとも6カ月のフォローアップ期間を設定して理学療法を検討しているランダム化比較試験。

データ収集分析: 盲検化された2名のレビューアが独立して、試験の質を評価してデータを抽出した。試験の質が不良であったため、メタアナリシスは行わなかった。

主な結果: ランダム割り付けされた患者150名からなる3件の試験のみを採用した。同じ介入法を検討した試験がなかったため、データを併合することは不可能であった。手動的リンパ液誘導療法(manual lymph drainage: MLD)とこれに続くセルフ・マッサージの治療群と非治療群を比較した1件のクロスオーバー試験では、両群に観察された改善は圧迫スリーブの使用によるものであり、さらに、MLDは試験期間のどの時点でもそれ以上のベネフィットをもたらさなかったと結論されていた。別の試験では、靴下の使用と非使用を比較していたが、試験からの脱落率が非常に高く、試験を完了した参加者は介入群では14名のうち3名、対照群では11名のうち1名のみであった。この試験の報告者らは、圧迫スリーブの着用にベネフィットがあると結論していた。包帯と靴下の併用と靴下のみを比較した試験では、靴下のみよりも包帯と靴下の併用群で過剰な四肢の容積が大きく減少し、この減少の差は長期にわたって持続したと結論されていた。

レビューア見解: 3件の試験はいずれも限界があり、追試を行って再現すべき試験であるため、その結果は慎重に解釈しなければならない。リンパ浮腫を管理する最良の方法を決定するには、多岐に渡る理学療法全体を検討した適切なデザインのランダム化試験が必要であることは明らかである。

Citation: Badger C, Preston N, Seers K, Mortimer P. Physical therapies for reducing and controlling lymphoedema of the limbs. The Cochrane Database of Systematic Reviews 2004, Issue 4. Art. No.: CD003141. DOI: 10.1002/14651858.CD003141.pub2.

Clib issue No.: 2005 issue 4

CRG名: Breast Cancer

* **ご注意:** この日本語訳は、試験的翻訳(Draft翻訳)版として公開するものであり、翻訳の正確さや質が保証されたものではありません。訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡下さい。また、この試験的翻訳版はコクラン・ライブラリ2005年issue 4に掲載されたレビュー・アブストラクトの翻訳です。コクラン・ライブラリは年4回改定版が発行されていますので、ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認下さい。